

# 上方落語に見られる尊敬語名詞類の語用論的分析

## A Pragmatic Analysis of the Nouns of the Honorific Expressions in the Kamigata Rakugo Stories

角 岡 賢 一  
KADOOKA Ken-Ichi

### 要旨

In this paper, a pragmatic analysis of honorific locutions expressing the speaker's honorific attitude will be shown citing the examples from the Kamigata Rakugo stories. Such honorific locutions cover the syntactic categories of pronouns, nouns, main verbs and auxiliary verbs. The focus in this paper will be put on pronouns and nouns. As the nature of the honorific expressions, those pronouns discussed in this paper are limited to the second person pronouns. The most characteristic finding here is that those second person pronouns can be arranged by the order of the honorific attitude of the speaker toward the listener. Further, we can point out that there are some gender gaps with regard to the use of honorific expressions; women more use politer expressions than men do.

### Keywords

上方言葉 (Kamigata dialect)、尊敬語 (honorific expressions)、人称代名詞 (personal pronouns)、名詞 (nouns)

### 第一節 はじめに

本稿では、日本語待遇表現という見地から上方言葉に見られる尊敬語の人称代名詞と名詞類を落とし哂を素材として検証する。名詞に接辞する接頭語や接尾辞についても議論する。

角岡 (2020) で語用論的分析として日本語待遇表現を体系化した。自分について述べる (一人称) か他者についてであるか (二・三人称)、待遇を上げるか下げるかという二つの基準によって、尊敬語と謙譲語、卑罵語と尊大語という四区分が成り立つ。従来の日本語待遇表現研究では敬語分析が中心であって、卑罵語と尊大語については全くと断言が可能なほど研究がなされていないということもその中で指摘した。本稿では、上方言葉の尊敬語を落とし哂に題材を求めて分析する。竹田晃子氏 (2017) は、方言における待遇表現の差を「西高東低」という冬型気圧配置の如き比喩で特徴付ける。つまり、待遇表現の多様さや頻度は西日本方言において顕著であり、東日本方言の一部には敬語法そのものがない地方も存在する、というものである。そのような見地から、京阪方言を中心とする上方言葉を落とし哂を題材とすることで用例が収集できるというのは意義があると考えられる。

まず、古い時代ではあるが実際に船場言葉がどのように語られていたのか見てみよう。香村菊雄氏『大阪慕情 船場ものがたり』には「船場ことば私見」という章があって、そこで幕末嘉永年間生まれである祖母の語りが書き留められている。年代から推察するとこれは明治初年頃、今から百五十年ほど前の船場言葉である。

(1) さいでごあすとも……わたしの父<sup>ててじや</sup>者は、ほんにきついお方はんでござりやしたわいなあ。兄<sup>あに</sup>さんが、夜<sup>よ</sup>さりおそうに戻って参じやすような事がござりやしたら、表のころろん落としておしまいやして、いっこ中い入れておくれやござへん。母<sup>はやひと</sup>者人が、もう堪忍してやって給もれとお取りなしやしても、極道者にやためにならんわいと、兄さん、なんぼ門口に立たされしゃんしたことでござりやしたやろか……（傍点は原著、一部振り仮名を省略した）

身内に対して語っているのであろう、絶対敬語になっている。まずは親族名称の「父者、兄さん、母者人」が目にとまる。このままの呼称で出現例があるのは噺では『七段目』祇園一力茶屋の場で、お軽が兄の平右衛門に呼びかける場面での「兄さん」のみである。「母者人」は「ははじゃひと」という言い方では例がある（以下を参照のこと）が、「はやひと」は『大阪ことば事典』でも見出し語として出ていない。それと対になるべき「父者」も、噺の中では見られないし、同事典にも見出し語としてはない。家族間では「お父つつあん」という呼称が通例である。一般名詞としては「夜さり、ころろん」が古風である。特に後者は「すべり戸の戸口を閉めると、ひとりでに棧が下りて戸が開かなくなる仕掛け」（同事典）という説明がないと分からないであろう。敬語法では「戻って参じる、給もれ、立たされしゃんした」が特記事項である。身内に対してもこのように丁寧な敬語法を用いる例は、噺の登場人物では見られない。補助動詞「しゃんす」は「し+やんす」で、「やんす」は「やす」から変化した形であろう。「ござります」の否定形が「ござへん」となるが、これも実例として貴重である。「いっこ」は「一向に」で、「中に」が「中い」となる音声・音韻変化も面白い。全体として香村氏ご自身の評通り、浄瑠璃を聴くような語り口である。内容としてはなんのことはない、噺に類出する跡継ぎの極道遊びなのである。船場の商家がどのような暮らしをしていたかという一端を窺うことができ興味深い。言語的分析としても貴重な例である。『大阪ことば事典』にも見出し語がない形は、廃用になったものであろう。

以下の節では、人称代名詞など語彙項目別の分類などについて分析していく。

## 第二節 人称代名詞の語彙項目

以下、上方言葉における待遇表現を統語範疇別に検証する。まずは人称代名詞である。定義上、尊敬語というのは相手または三人称目当てであるから一人称代名詞は対象外である。従って、二人称代名詞から始める。

### 二人称人称代名詞

待遇表現を品詞別に分析すると、語彙項目が多様で卑尊度の幅も大きいのが人称代名詞である。本節でも、まずは人称代名詞の分析から始めることとする。誰が誰にどういう状況で呼んでいるかによって呼称が大きく変化するが、男女の性差も関わっている。後に纏めて分析

するため、通し番号を振る。

### ①「あんたはん」

『大阪ことば事典』33頁で「アンサン」という見出しで「あなたさんの略語。主として商人用語で、一般には、アンタハンを用いた」（強調の傍点は原著、音の高低を示す傍点は省略した）という語積がある。しかし実例では「あんさん」は頻出するが、「あんたはん」は珍しい。噺『崇徳院』において、若旦那が高津の宮で見かけた娘はんが緋塩瀬の茶袱紗を忘れて席を立ったところに、「これあんたはんのと違いますか」と声を掛けている（『米朝全集』第四巻）<sup>\*1</sup>。良家の育ちである若旦那が初対面の異性に「あんたはん」と声がけをしているというのが注目に値する。確かに「あんさん」に比べても余所余所しい語感である。

噺『口入れ屋』で、丁稚の定吉が神棚のお灯明を消して廻りながら「神さんもなぶりもんやがな、まるで。ま、えらいすまへんけど、消してもらいまっさ。あんたはんもえらいご災難でんなあ」と喋っている（『米朝全集』第三巻）。神棚に祀ってある神様を相手に「あんたはん」と呼びかけているのである。丁稚が神様に話しかけるという立場上、この「あんたはん」は「あんさん」と同程度の敬意表明と捉えておく。

### ②「あんさん（方）」

「あんさん」の例を噺『けんげしゃ茶屋』から挙げる（『米朝全集』第三巻）。大晦日に路上でミナミの幫間又兵衛さんと出くわした村上の旦那さん<sup>\*2</sup>、立ち話の中で新町の一件について説明すると、又兵衛さんは「はあ～っ、旦那さんそらまああんさんやなかったらでけん芸当でおまっせ」と感想を述べる。幫間として又兵衛さんは村上の旦那さんに最上して貰う立場である。そういう相手に対しても「あんさん」という人称代名詞で呼びかけているという点は注目に値する。

もう一点、形態論的観点から興味深い現象が複数形の「あんさん方」について見出せる。日本語全般において、名詞の単数と複数の区別は曖昧であると言えそうである。特に普通名詞については「木々、日々、人々」というように豊語形式は見られるものの、複数形と言うよりは「個々の木、日、人」を指しているようにも考えられる。しかし人称代名詞の「あんさん」と「あんさん方」については、厳然たる単数－複数の区別がなされなければならない必然性がある。即ち、「あんさん」と呼びかけるのは相手が一人の場合に限られる。相手が二人以上の場合には「あんさん方」と複数形態素「方」の付加によって明示することが必然となる。噺『宿屋仇』で、宿を探す兵庫の若い者三人連れに対して、日本橋の宿屋紀州屋源助から、「へえ、あんさん方どうぞお泊まりを」と声を掛けられる（『米朝全集』第七巻）。この場面では、三人連れであるというのは見たところ明らかであるので「あんさん」と声を掛けることはできない。噺『瘤弁慶』の前半は大津の宿であるが、ここでも宿の客引きは喜六清八を捉まえて「あんさん方、お泊まりを」と声を掛けている（『米朝全集』第三巻）。

### ③「あなた様」

「あんさん」よりも丁寧度が増すと、「あなたさま」になるであろう。噺『骨釣り』で島之内の袋物屋の娘ひなと名乗る女が「、、身寄り頼りのない悲しさ、水一口の手向けもなく、浮かびもやらで今日が日までむくろを沈めておりましたが、あなたさまのありがたいご回向にあずかり、浮かぶことができます」（『米朝全集』第三巻）と物語る。相手は幫間の繁八である。

場面はいま少し説明が必要であろう。繁八が若旦那のお供で、川遊びで釣りをする。釣り上げたのが人の頭蓋骨で、若旦那に諭されてお寺で廻向をして貰う。娘は夜中、繁八宅に出現して礼を述べたのである。女から男に対して、しかも初対面という場面であるから最大限の丁寧度で「あなた様」と称したと考えられる。

次は芝居がかった調子で発せられる「貴方様」である。噺『土橋萬歳』では、放蕩の若旦那を忠義の番頭が諫めようとする（『米朝全集』第五卷）。番頭はお茶屋の外で説得しようと試みたが、二階の座敷に引き上げられてしまう。芝居がかった調子で「あなた様はな」と呼びかけると、傍らの幫間が口三味線で合いの手を入れる。すると番頭は「誰やそんな芝居の真似みたい……。わたい歌舞伎役者の声色使うてんのおまへんのやがな。若旦那さん、まあ、あんたまあ、なんということを……」と、次にはあんた呼ばわりになっている。ここでは番頭の意図は読みづらいが、「あなた様」の実例である。次期当主であるから「貴方様」と奉るのが原則であろうが、お茶屋遊びの様子を目の当たりにして、ついあんた呼ばわりになったとも考えられる。

次の「あなた様」は『三枚起請』に見られる。難波新地の宇津木という店に勤める小輝という娼妓が、友人同士である源兵衛と喜六、清八という三人に同じ文面の起請文を渡す。殆ど漢字がない元の文面は下、読みやすいように漢字仮名交じりに改めたのが上である（『米朝全集』第四卷、高島幸次氏（2018：96、97））。

(2) 一、天罰起請文之事、私こと年明け候へば、貴方様と夫婦になり候こと実証也、後日のため、依って件の如し。下駄屋喜六様、宇津木店小輝こと本名たね  
ひとつてんはつきしやうものこと。わたくしことねんあけさふらへば、あたさまとふふになりさふらうことじつしやうなり。ごじつのためよってくだんのごとし。げたやきろくさま、うつぎみせ こてることほんみやうたね

同じ文面で三枚の起請文、とは言え喜六宛ての文面(2)では「あなたさま」の「な」と「ふうふ」の「う」を故意に抜いている。清八宛の証文は字が揃っている。「貴方様」は書き言葉で、最上級の丁寧度であろう。起請文という文書の性質上、書式や言葉遣いは固定されていたものと思われる。座敷で対面した折は小輝は「源やん、お越し」と迎え、源兵衛に対して「あんた」と呼びかけている。起請文の事情などについては高島氏の上掲書が詳しい。噺において、文面を読み上げているかの如くに語るのが話芸というものであろう。喜六は、末は小輝と所帯を持てるものと喜んだのであるが、小輝の方が男を手玉に取る手練手管では二枚も三枚も上手であった。

#### ④「尊公」

最上級の尊敬度、「あなた様」と同程度とも考えられ、漢文調のような硬い語感を持つ敬称に「尊公」を挙げる。これは特殊な言い方で、実例は『くしゃみ講釈』で男——例によって名前を呼ばれていない——が朋輩の政はんに対して「それではなにぶん、尊公のご加勢をもって、尽力を」という一例しかない（『米朝全集』第三卷）。場面は、男が恋路の邪魔をされた講釈師の後藤一山先生に仕返しをする智慧を政はんが貸そうとしているところである。『日本国語大辞典』では「尊公」は、多く男性が男性に対して用いるという説明がある。この場面にも該当

するが、男の言い方がまるで講釈師のような文語的な言葉遣いを選んでいるのである。

### ⑤「あなた」

標準的な現代日本語で、二人称代名詞として代表的とも言えるであろう「あなた」は、噺では探すのに苦勞するほど見当たらない。一つには、「あなた」という呼びかけは現代語的で余所余所しいという語感がするのと、実際に相手に向かって「あなたは、、、」というような言い方が詰問調になるからというような観察が可能であろう。現代の家庭であれば、妻が夫に向かって「あなた」と呼びかけるのは見慣れた風景であろう。しかし「古典落語」と言われる時代においては、これでは斬新すぎる。実例として、子から親への呼びかけが見られた。噺『親子茶屋』で、大店の当主が毎日のようにお茶屋遊びをする息子に対して意見ををする（『米朝全集』第二巻）。息子が「そらこっちも一緒にんがな。日々毎日、相も変わらんことばかり聞きたいもんか、聞きとないもんか」、親「それをこなたが言わしなさる」、子「あんたがおっしゃるので」「こなたという人は」「あなたという人は」「掛け合いじゃ、まるで」。この掛け合いで、親子が互いと呼ぶのに種々の二人称代名詞を交えている。親から子へは「こなた」と丁寧である。逆に子から親へは「あなた、あんた」と丁寧度で差がある。「あなた」はどこか余所余所しい響きがあるが、「こなた」とは対になる。ところが「あんた」は「こなた、あなた」に比べると粗略な扱いである。どうやら、ここら辺りに極道息子の片鱗が窺えるようである。

男から女への呼びかけという珍しい例がある。噺『阿弥陀池』で、尼寺に押し入った強盗が拳銃を突き付けて尼僧を脅かすが、日露戦争で従軍した上官の妻女が出家したものと知る場面である（『米朝全集』第一巻）。「さては貴女が山本大尉の奥方でございましたか」と話したと甚兵衛さんは言うが、これは作り話である。『阿弥陀池』という噺は、桂文屋師が創作したと伝わっているが、新聞を読むことにしても、強盗が拳銃を持って押し入るということにしても、当時の斬新な風俗を取り入れている。

次は先代米團治師の筆になる噺『代書』の台本である（米朝師編『寄席随筆』）。この噺は、実際に米團治師が代書事務所を構えていた折の実体験を基にしており、今から八十年ほど前の世相も反映している。戦後になってからはこの噺は履歴書を代筆してもらう依頼人の段だけで完結させているが、本来は依頼人は四人であった。その三人目が「ハイ。チョド物をタツねますか、アナダ、トッコンションメンするテすか」と入ってくる。朝鮮語を第一言語とする話者の語り口を模しているのが、無声音と有声音が変則的である。例えば「あなた」を「アナダ」と表記している。「トッコンションメン」とは渡航証明で、当時は朝鮮半島から日本に渡航するには下付願いを出す必要があったのである。その依頼に代書屋に来た場面である。しかし日本語を第一言語とする話者であれば、代書屋に入って開口一番に「あなた、渡航証明しますか」というような尋ね方はしないであろう。いかにも日本語を第二言語として学習・習得した話者の言葉遣いであるように描かれている。この辺りが、話し手との社会的関係などを深く考慮に入れずに取り敢えず聞き手を「あなた」と称する例の先駆けと言えそうである。

妻から夫への呼びかけは「あんた」が無標であろう。「あなた」の実例としては、二代目の故・枝雀師が演じた噺『延陽伯』で長屋暮らしの男に嫁いできた延陽伯に、男が「アナアタア、コトオバア、ワタァシィ、難シクテワカリィニクイィ」と外国人に話すような妙な訛りで語りかけている（『枝雀全集』第四巻）\*<sup>3</sup>。夫が妻に呼びかけるという点において、男女が逆転している。

## ⑥「あんた」

妻から夫に「あんた」と呼びかけるのは、長屋住まいの夫婦であればこれが最も普通であろう。しかし逆に、夫から妻への呼称としては少ないように思われる。先代米園治師の筆になる噺『弱法師』台本には、店の当主が妻女に「すると何かい貴女<sup>あんた</sup>はどうしても庖丁屋の聴き損ないじゃ、この俊三が注文をした口上に間違いはなかったと言ひ張るのやな」と談判している（『寄席随筆』）。俊三は出奔したまま行方知れずとなり、一年後には法要を営む。その席で妻女は手っ伝いの熊五郎に「ほんにあの時にもあんたに<sup>えら</sup>甚いお世話になりましたなァ」と述懐する。その後、妻女から当主に「いえ、それはなァ。貴方<sup>あんた</sup>かて吾が子が可愛いと思もやこそ言うて遣っとくはったんだすわなァ」と逆向きながらあんた呼ばわりである。夫婦が互いに相手を「あんた」と呼んでいる例は珍しい。夫は妻をお前呼ばわりすることが多いからである。

筑摩文庫版の『米朝全集』第一巻『正月丁稚』において、サゲ近くで番頭が旦那に向かい「へえへえ、昔からあんた、降る（鶴）は千年といいまっしゃろがな」とあんた呼ばわりをしている。しかし創元社版の全集では、このあんた呼ばわりはない。本来ならば「あんた」は対等あるいは自分より目下の者に対して用うべきであろう。ここでのあんた呼ばわりは、口を滑らせたと見るべきかも知れない。卑尊度で測るとすれば、中立より少し卑に触れているが、親しみや愛情が籠もっている。

## ⑦「そち」

当主が丁稚に呼びかけるのに、最も丁寧<sup>ていねい</sup>に聞こえるのが「そち」という言い方であろう。これは分類上、尊大語と言える。噺『正月丁稚』で、次のような会話を交わしている（『米朝全集』第四巻）。

(3) 定「ああ、旦那さん、もう遊びに行けまんのやなあ」

旦那「これこれ、そちにはまだ用事がある」

定「なんでわたいに用事がおまんねん」

旦那「これから年始回りに行く。そのお供についといで」

定「うーん、そんなんやったら、亀吉とんかて、友吉とんかて、いてまっしゃないか」

旦那「いやいや、亀吉や友吉ではいかんねん。年始のお供にはそちはまことによう似合うねん」

この会話には人称代名詞や、人名に付ける敬称の実例が多様に展開されており、興味が尽きない。まずは上述の「そち」、対して定吉は自称を「わたい」としている。朋輩の丁稚である亀吉や友吉に敬称「どん」を付けているが、同化によって無声化し、促音も挿入されて「亀吉とんや友吉とん」となる。当主は丁稚の名前は呼び捨てにする。「そち」は尊大語として形式張った響きがあるが、「そちはまことによう似合うねん」の終助詞「ねん」が俗語的で「そち」とそぐわないという印象を受ける。「そちはまことによう似合う」とすれば、齟齬はなくなる。次も当主が丁稚に対して用事を言いつける場面である（『米朝全集』第五巻）。噺『次の御用日』で、嬢<sup>とう</sup>やんのお稽古事にお供に付いて行くように常吉が命ぜられる。自分でなくとも、亀吉や定吉のお供でも良いのではないかという常吉の申し立てに、当主は「亀や定ではいかん。どういふものか、常吉やないといかんちゅうて、あの子はそちが虫が好くねん」と言い含める。ここでも「好くねん」という文末である。

もう一例の「そち」は、お寺の和尚が小坊主（実は実子）に対して呼びかけている。断『ぬの字鼠』で、和尚が「どうしてそちは、そう、どもならんのじゃ」と小言を言う（『米朝全集』第六卷）。ここは長々とした小言で、途中で「お前もそのままにしとけばええのに、うろたえくさって、馬鹿が……」と叱りつける。実子であるだけに、感情が生で表出するのであろう。

#### 〔⑧そなた、⑨こなた、⑩こんた、⑪おまはん〕

二人称代名詞で「そなた」と「こなた」を比較してみる。『宿屋仇』で、源兵衛が回顧談として小間物の行商で高槻藩の重役である小柳彦九郎宅に向いたところ、奥方が一人で留守番、「これはこれは小間物屋、今日は旦那殿は留守なり、女中どもは皆宿下がり、わらわ一人で徒然の折、ちとそなたに誂えのしたいものがある。どうぞこちらへ上がってたも」と招じ入れられる。武家の奥方が登場する場面というのは、この断以外にないので貴重である。女性としての自称が「わらわ」、町人である源兵衛には「そなた」と丁寧な代名詞で呼びかけている。「たも」という命令形も丁寧である。次の例は、断『テレスコ』で、長崎の大浦で仁助と名乗る漁師がサゲ前で妻に向かって「そなたがそんな……火物断ちまでしてくれた甲斐ものうて、わしは死罪を申し渡された」と嘆く（『米朝全集』第五卷）。随分と丁寧な言葉遣いである。

旅断『煮売り屋』は、東の旅はお伊勢さん詣り『伊勢参宮神之賑』で『七度狐』と続けて口演されることが多い（筑摩書房版米朝全集）。煮売り屋の屋号は「柳屋」であるが、その看板に「一せんめし 酒肴いろ／＼あり やなきや」と書いてある。往時の仮名遣いで、濁点はない。縦書きでは、「／＼」は「く」の字を長く引き延ばしたようにも見える。それを喜六が「ひとつせんめし 酒肴いろおくうくう ありや、なきや」と読んで、清六に「一膳飯、酒肴いろあり、柳屋やがな」と窘められる。二人が泥鰯汁を注文したところ、当主は「これこれ婆どんや、客人泥鰯汁がええっちなさるでな、ちょっとこなた町まで味噌買いにきておくれ。わしゃこれから箆持って裏に泥鰯すくいに行ってくるさかい」とのんびりしたものである。ここでは「婆どん」という呼びかけと「こなた」という人称代名詞が併用されている。『煮売り屋』の場面は奈良から南下して桜井に向かう道中が想定されている（桂文我師『伊勢参宮神之賑』による）が、そのような鄙の土地でも連れ合いを「こなた」と呼ぶ気遣いが見られるのである。「こなた」は身内であり、「そなた」は身内でない者に対しての人称代名詞である。

珍しい例で、猿回しの猿に「こなた」と呼びかける場面がある（林家染丸師の口演筆記による\*<sup>4</sup>）。断『堀川』は芝居『近頃河原達引』猿回しの段から名前を取ったのであるが、喧嘩極道の息子を起こすのに、猿回しの与次兵衛さんが「おい太夫、ええかな、これからな、こなたと父とでな、ここのオッチャン起こすねや。名代の腕力や、もし父に無茶なことしてきたら、バリバリッと顔かきむしって血だらけにしてやれ」と言い含める。頭の良い猿のこと、飼い主の言い分はこれぐらいは理解したであろう。猿に「太夫」と呼びかけているのも面白い。

代名詞「こなた」が簡略化された形に「こんた」がある。二拍目が撥音化することによって、「こなた」の三音節が「こんた」では二音節三拍になる。考えてみると、「あなた」が「あんた」と音声・音韻変化するのと全く同様の過程を経ているのである。しかし「あんた」に比べると「こんた」の出現頻度は何百分の一かという程少ない。『百年目』で、当主が赤梅檀と難蓮草の喩え話で番頭を諭す場面がある（『米朝全集』第六卷）。「こんたの骨折りで毎年大福帳が一冊ずつ汚れていく、ありがたいこっちゃと思てる」「こんたという難蓮草に枯れられたら、この赤梅檀、ひとたまりもないでな」という具合である。ところが、同じ場面で「こなた」も併用

されているのである。「こなた一家の主を旦那というのはどういうわけか知ってなはるか…」「まあ、ここのうちにたとえて言うたら、さしずめわしが赤梅檀、こなたが難莖草じゃ」。つまり、少なくともこの場面では「こなた」と「こんた」は同程度の卑尊度であると言える。但し、使用頻度は「こんた」がかなり少ない。『百年目』でも、「こんた」という呼びかけはこの場面以外に見られない。この場面では、当主は夜通しかけて帳面を調べ、番頭が店の金に手を着けていないことを確かめた上で「老婆心ながら、今後ともひとつ、よろしゅうお頼もうしますぞ」と番頭を許すのである。一家の当主とは言え、実務は番頭に任しているという往時の船場商家がこうであった、という実情が克明である。「こなた、こんた」という言葉遣いに船場大家の当主という風格が滲み出るような演出である。

しかし、これだけではない。直後に「ここに孫の太鼓があるで、わし叩くさかい、おまはん踊ってみ」「しかし、昨日は相当うろたえてたとみえて、妙な挨拶をしたなあ、おまはん」というように「おまはん」呼ばわりもしている。もっと珍しいのは「しかしなあ次平衛どん、気イ悪してもろては困るが…」と番頭の名を呼んでいる点である。後にも先にも、当主が番頭を名前と呼ぶのはこれ以外に例がない。これはお茶屋遊びの折りに番頭が「つぎさん」と幫間や芸者連中から呼ばれていることと関連するかも知れない。遊びの席では本名そのままというのは具合が悪いが、全く無関係でも困る、という辺りで「次平衛」の「次」を訓読みして「つぎさん」と呼び習わしたものであろう。

## ⑫「そこもと」

晰『ふたなり』で代官所の役人二人が検死をするのに「ご同役、ご披見を」「いや、まず、そこもとから」という会話を交わしている（『米朝全集』第七巻）。『日本国語大辞典』には「対称。多くは、武士がやや目上と思われる相手、同輩、もしくはそれ以下のものに対して用いた。まれに町人の使用例も見受けられるが、格式張った言い方で、老人、家主などが用いた。時代が下ると待遇度も落ちた」という説明がある。ここでは同輩間の会話である。漢字では其処許などの標記である。「其処許」と「某」で対になる。

## ⑬「貴殿」

現代においても使用することがある「貴殿」という尊称は、晰では少なかった。『関津富』という珍しい晰で主人公が、その名も「奥州二本松の住人、黒雲雷之助夏鳴入道雷吞」と名乗って道場に乗り込む場面がある（桂文我師『続 復活珍品上方落語選集』）。無論、偽名である。道場で門人が「貴殿のお名前は、何と仰るので」と尋ねたからである。道場主の長沼四郎左衛門と手合わせになった段では、道場主は更に丁寧に「ご貴殿」と接頭辞付きの呼びかけをした。

ここでは以上のように二人称代名詞を列挙したが、纏めとして最終節で分析を行う。

## 第三節 一般名詞の語彙項目

本節で採り上げるのは事物の名称など一般の名詞であるが、性質上、聞き手に対する敬意表明ではなく丁寧語という位置付けをする。また、「酒」を「ささ」と言うなど、言い換え表現を扱う。「お、ご」などの接頭辞付加による丁寧語あるいは美化語は一般的で数も多いので、

接辞の項で論じる。登場人物は武家の奥方や公家に奉公していた女性などが中心である。会話が多い落語の特性として、人称代名詞は上述のように多様であった。その人称代名詞に比べても、尊敬語あるいは丁寧語としての名詞は限定される。

### 「お家」

元来は「家」という普通名詞に接頭辞「お」が付加されたものであるが、家の中に住む主婦を指すようになった（『大阪ことば事典』97頁）。噺『質屋蔵』で、担ぎの呉服屋が長屋を毎日行商して歩く様子が質屋当主によって語られる（『米朝全集』第六卷）。呉服屋は昼時に訪問した家で「お家、ちょっとここでお弁をつかわしとおくなはれ」と断る。現代の標準的な日本語であれば、「奥さん」というような呼びかけであろう。人称代名詞的な側面もある呼びかけであるが、「お家」は名詞に分類しておく。「弁当」という漢語を「お弁」というように省略かつ接頭辞付加した例については、別項で論じる。ここでは目の前に居る相手に対して「お家」と呼びかける用法である。嘗て商家では、隠居した当主の配偶者を「お家はん」と称した。「お家」というのは対象範囲が広いが、「お家はん」となると限定された人間関係の中でしか通用しないという、語用論的側面に注意が必要である。

### 「しらげ、よね、一文字草」

京の公家に長年奉公していたために言葉が難しいというのを間に入った甚兵衛さんが納得させて長屋の男に嫁いできた延陽伯の名前から取った同名の噺である（『枝雀全集』第四卷）。この噺は、延陽伯の言葉遣いが日常語とかけ離れている所から笑いを起こすようになっている。それが過剰になると、実際とは異なる言葉遣いになることもある。以下に指摘する「白根草」が一例である。まずは祝言が済んだ夜の夜中にむくむくっと起き上がり、枕元に両手をつけて「ああら我が君、一端偕老同穴の契りを結びしうえからは、千代八千代に変わらせ給うことなかれ」と宣した。夫を「我が君」、末永くという意を「千代八千代」という難しい言い様をしている点が滑稽である。翌朝、ご飯を炊こうとして米の在処を尋ねる。最初は女房詞で「しらげ」、次に「よね」と言い換えるが、いずれも誤解を招く。三度目に「こめ」と言い直して、やっと意が通じた。次に味噌汁の具をどうするか案じていたところに、振り売りの八百屋が通りかかる。延陽伯は「そもの携える白根草、一束の値、幾何なりや」と尋ねている\*<sup>5</sup>。「そもの」は女房詞で「そなた」の「そ」に「もじ」を添えたのが語源である。「白根草」は『日本国語大辞典』ではいもがらの女房詞、芹の異名という説明である。江戸ネタでは『垂乳根』と改題され、この場面は「そのほうが携えたる鮮荷のうち一文字草、値何銭文なりや」（麻生（1999: 37）\*<sup>6</sup>）となっている。一文字草はまさに葱を指す。

### 「ささ」

武家の奥方が登場する噺というのも珍しいが、『宿屋仇』で高槻藩の重役小柳彦九郎宅での様子が語られている（『米朝全集』第七卷）。後に白状することになるが、源兵衛は三十石舟で小耳に挟んだ事件を我が事のように語ったのである。実体験のように語った場面では奥方に座敷に通され、「そなた、ささは食べぬかえ」と尋ねられる。「ささ」は酒の意である。「食べぬかえ」の終助詞にも着目したい。疑問を表す終助詞「かえ」で、常体でありながら女性特有の柔らかさが出ている。これが「食べぬか」という言い方であれば、紋切り型で詰問のような些

か強い調子に感じられる。

### 「御衣」

宮中での言葉遣いを一例挙げる。噺『はてなの茶碗』で、茶道具屋の金兵衛さんが関白鷹司公に持ち込んだ清水焼の茶碗が御所中の大評判となり、遂に時の帝までが「朕もその茶碗が見たい」とご所望となる（古今亭志ん生師による口演）。茶金さんは精進潔斎して茶碗を持参したが、どんな方の前へ出ても同じ事、水を入れた茶碗からぼたりぼたり、、、「御衣おんぞの裾を濡らしました」。『日本国語大辞典』によると「おん」は接頭辞で、「着る人を敬って、その衣服をいう語。お召し物」という説明と、「みぞ、ぎょい、おんころも、おおんぞ」という言い方が並んでいる。「おんぞ」は御所言葉と分類できるであろう。

### 「お饅、お弁、お座布」

ここまでは女性の登場人物による丁寧語もしくは美化語と称しても良い部類の名詞であったが、男性でも同様の例が見られる。またここで扱うのは、漢語由来の名詞を略して一音節化し、なおかつ和語接頭辞「お」を接辞するという共通点がある。

『饅頭こわい』において、佐藤光太郎なる人物が饅頭のことを「お饅」と称して一悶着が持ち上がる（『米朝全集』第七巻）。この人物、サゲ近くになって友達連中が「この一件が新聞に出たら、、、」と評定するうちに名前が明らかになるが、光つつあんこと佐藤光太郎氏はおそらく、「何が怖いか」と尋ねられて「お饅頭」と答えるのではそのものずばりであるから、遠回しに「お饅」という言い方にしたのであろう。案の定、集まっていた若い衆からは「お饅……お饅というたら、大阪でお饅ちゅうたら、饅頭のこってっせ。食べる饅頭、お菓子の。あれが怖いのか、ええ」という反応が返ってくる。これ以降は「お饅」という呼び方はなくなり、「饅頭」一辺倒である。意図的に接頭辞「お」を付けたものであろうが、「まん」だけでは意味が通らない。「お饅」は船場言葉らしい上品な響きである。

「お弁」は、噺『質屋蔵』で、担ぎの呉服屋が長屋を毎日行商して歩く様子が質屋当主によって語られる場面である（『米朝全集』第六巻）。呉服屋は昼時に訪問した家で「お家、ちょっとここでお弁をつかわしとおくはれ」と頼む。「弁当」という漢語を「お弁」というように省略かつ接頭辞付加した言い方である。

この流れで、「座布団」も漢語系と扱う。「座布団」の前半を取ってきて「お」を付け、「お座布」というのが噺『不動坊』に見られる（『米朝全集』第七巻）。独り者の利吉に、家主が講釈師不動坊火焰先生の未亡人となったお滝さんの縁談を持ってきた。急に態度を変えた利吉、「まあ、ちょっとお座布当とおくれやす、お座布当とおくれやす」と愛想をする。また噺『はてなの茶碗』で、茶金さんが近くを通りかかった油屋を請じ入れて、「まあまあ、お座布団ざぶふを持ってきなはれ」と座布団を持ってこさせる（同第六巻）。

ここで挙げた三語の原形「饅頭、弁当、座布団」は、漢字で表記することによっても漢語系であると考えられる。ところが、接頭辞は「御」ではなく「お」が当てられて「お饅頭、お弁当、お座布団」となる。更にそれが短略化されて「お饅、お弁、お座布」となるところが共通している。

### 「おぶ、ぶぶ」

もう一つ、丁寧語として名詞言い換えの例を挙げる。京阪方言ではお茶のことを「ぶぶ」と言う。お茶漬は「ぶぶ漬」になる。『大阪ことば事典』には、「オブ」という見出しで、「茶のことをブブといい、それにさらにオを付けたもの。オブウともいう」（音高を示す傍点は省略した）という説明があり、次には「オブヅケ」（ブブ漬）という見出し語が見られる。「ぶぶ」は「ぶ」とまで約めることは不可能であるが、接頭辞「お」の付加によって「おぶ」となる。噺『不動坊』で、家主が持ってきた縁談を店子の利吉が喜び、家主の帰り際に「えらい、ぶぶもあげまへんと……去んでからゆっくりおあがり」と見送る（『米朝全集』第七巻）。『向う付け』という噺で、葬礼の帳場を任された無筆の二人が参列者の帳面付けに難儀する場面がある（同書）。お互いに相手に帳面付けを頼もうと考えて、「ぶぶが入りました。まあお茶をひとつ」と腹の探り合いになる場面である。また『軒茶屋』という噺で、お茶屋の姐貴が客のターさんに「まあ、おぶをどうぞ」と勧める（同第一巻）。

### 「おみや」

和語の「みやげ」に接頭辞の「お」を加え、元の「みやげ」三音節目を略して「おみや」という語形になる。噺『卯の日詣り』は住吉さんにご参詣となるが、「住吉踊り、お買いやす、おみやお買いやす」と売り声に呼ばわっている（『米朝全集』第一巻）。

### 「おいど」

身体の部位を指す名詞で、丁寧語の部類が見られるのは珍しい。身体の各部位を指す名詞は卑罵語の類で多様に見られるが、丁寧語あるいは美化語と考えられるのは尻の意で「おいど」だけではないかと思われる。「おいど」という響きは、丁寧語・美化語ではあるが、部位が部位であるだけにどこか滑稽味を有する。『あん七』という噺で無筆の七兵衛が火鉢で灰の上に字の書き方を教わる（『米朝全集』第一巻）。「七」字の書き方として、「十」字の二画目で尻を曲げたら「七」になるというので、「ちょっとやっご覧あそばせ」と田中氏の妻女が促す。二画目を曲げる段で「火箸のお尻をちょいと曲げて」と言うや否や、七兵衛は本物の火箸を曲げてしまう。ここでは人体の尻ではなく、「七」字の二画目を曲げることを火箸の尻を曲げる、というように誤解したのである。

### 「御難」

漢語系の「難」に漢語接頭辞として「御」が接辞した「御難」というのは、興行界で旅巡業に出たものの、不入りで身動きが取れなくなったという状況を言う業界用語である。噺『不動坊』で、講釈師の不動坊火焰先生、山陽路に巡業に出たものの御難続き、流行病で客死するという結末に到る（『米朝全集』第七巻）。これを「行く先行く先が不入り続きで、御難に遭うて、広島の宿屋で身動きが取れんようになった」とある。噺『べかこ』も、噺家の泥丹坊堅丸師が肥前の武雄で御難に遭遇して、大黒屋市兵衛という宿屋で世話になっているという設定である（同書）。

### 「仁、御仁」

漢語のような字面で「仁」と書いて「じん」と読む。音読みになってはいるが、先の「御難」

にしても和製漢語であろう。噺『近江八景』で、易者が客から「そうかて、こないだお彼岸に天王寺さん通ったら、あんた、今日は師匠の十三回忌言うてたがな」と指摘されて、「それはわしではない。別の仁じゃ」と答える（『米朝全集』第二巻）。この易者は、本題に入って友達を連れて来ていた客に「こちらの仁も見ろのか」と尋ねる。別の噺『暮の油』においても、暮の油売りが客を指して「はい、ああ、そちらの御仁」と応対している（同書）。また珍しい噺で、『関津富』に俳人が諸国行脚の武者修行と偽って道場主の長沼四郎左衛門と手合わせをする場面がある（桂文我師『続 復活珍品上方落語選集』）。その場面で道場主は「しかしながら、もしこの御仁が、剣の道を知らずして、ここに木剣を持っておるのなら、それこそ身共が、この御仁を殺しかねん」とは、心中で考えているのである。それにしても「御仁、身共」とは丁寧な言葉遣いであるが、「御仁」は相手のことを敬う尊敬語と言える。

### 「御意」

噺『立ち切れ線香』の速記で、曾呂利新左衛門師の速記を基にして先代米團治師が落語研究家である渡辺均氏に当てた手紙の中に見られる。書簡は七十年ほど前に書かれたのであ<sup>あがり</sup>るが、速記はそれより十年ほど前のものであり、言葉遣いは古風である。百日の蔵住まいが満期になったのかと尋ねる若旦那に、番頭は「御意にございます」と答える。時代があった、古風な返答である。

### 「ご如才」

『大阪ことば事典』には「如在無い」という表記で、「ぬかりない。ぬけめない。如在はゾンザイ〔存在〕と等しくありのままということで、ていねいにせぬ義である。如才は当て字」とある。『日本国語大辞典』では「如在無・如才無」という表記で、「人や物事に対して手抜かりがない。手落ちがない。なおざりにしない。気がきく」という説明になっている。現代では、「如才がない」というように定型句化しているものと考えられる。噺『百年目』では、隠れ遊びをしていたつもり<sup>あがり</sup>の番頭が花見の場で当主と鉢合わせする場面がある（『米朝全集』第六巻）。その場で当主は、周囲の取り巻き連に「ああ、みなさん方、これはな、うちの大事の番頭さんじゃで、怪我ささんように遊ばしてやっとおこなされや。ご如才もあるまいが、日が暮れはちょっと小早う帰してやっとおくれやす」と頼む。「改めて御願いをするまでもない、抜かりはなかろうが」という気持ちが感じ取られる。

### 「究竟」

噺『べかこ』から、漢語系の「究竟」という語を採り上げる（『米朝全集』第七巻）。泥丹坊堅丸という奇妙な名前の噺家が、西国に巡業に出て御難に遭う。御難というのは、巡業が不入りで難儀することをいう。肥前の武雄で大黒屋市兵衛という宿で世話になっていたところ、お城の菅沼軍十郎という侍がお姫様が気病いで、何か気晴らしになるような催しはないかとお尋ねになった。そこで堅丸さんのことを聞き及んで「それは究竟じゃ」。大黒屋が周旋をして、なかなか評判が良いということを知り、また「おお、それは究竟じゃ」。究竟とは『日本国語大辞典』によると都合の良いこと、お誂え向きの意であるという。現代の日本語においては究竟という語は廃用に近いと思われるが、場面によっては必要な語彙となることもあるようである。小咄『試し斬り』でも、侍言葉として例が見られる（『米朝全集』第五巻）。侍が新たに

買い求めた刀、演題にあるように試し斬りをする機会を探っていた。日本橋の袂で「野伏せりの類い、これ究竟の試しものと心得て、ずっと刀を抜き放ちましてな」と、随分と身勝手な理屈である\*<sup>6</sup>。状況としては、「これ幸い」と自分に都合良く物事を運ぶというような前提で成り立っていると言える。

### 「ご尊顔、恐悦」

噺『本能寺』で、武智光秀（史実の明智光秀）が主君である小田春永（織田信長）へ対面の挨拶として「我が君様の、いつに変わらぬご尊顔を拝し、光秀、恐悦に存じます」と述べる（『米朝全集』第七巻）。「ご尊顔、恐悦」というのは臣下として主君に最大限の尊敬度をもって挨拶しているのである。『日本国語大辞典』では、「尊顔」に「貴人の尊い顔。また、他人を敬って、その顔かたちをいう語」、「恐悦」に「目上の人に関したことやその好意などを、たいそう喜ばしく思うさま。きわめて喜ばしいの意」という説明がある。

### 定型句「畏くも」

品詞分類が可能な単語という次元より大きな纏まりを「定型句」と扱う。上掲の「恐悦に存じます」もこれに近い。ここでは「畏くも」を副詞句と分類する。『日本国語大辞典』では「おそれおおくも。もったいなくも。もったいないことに」という説明がある。实例は、噺『天狗裁き』でお裁きをする奉行である（『米朝全集』第五巻）。「畏くも將軍家のお眼鏡をもって奉行職を務むる余にも、夢の話物語ることならんと申すか」と、將軍家の威を強調するような調子になる。

### 形式名詞への接辞

敬称としての用例が多い「さん」に、形式名詞に接辞される特殊な例がある。噺『千両蜜柑』で、真夏に蜜柑を食べたくなくて寝込んでいた若旦那に、大坂中を探し回って一つを手に入れた番頭が「若旦那、お待っとうさんでございました」と差し出す場面がある（『米朝全集』第四巻）。もっと丁寧と言えば「お待ち遠様」となるのであろうが、考えてみると「お待ち遠」というような形式名詞そのものの存在も不思議であるが、その名詞に「様、さん」など敬称を足すというのも日本語独特、また京阪方言に独特であろう。『高津の富』では、富籤が当たったら半分を上げようという泊まり客の申し出に当主が「こらまあぎょうさんに、ありがとうございますとおます」と礼を述べている（『米朝全集』第三巻）。ここでも形式名詞「ありがとう」に「さん」を接辞している。物事を丁寧に言う丁寧語の一種であると同時に、聞き手に対する心遣いを示すという語用論的側面もあるであろう。挨拶としての「ごきげんさん」が、噺『子ほめ』に見られる（『米朝全集』第三巻）。喜六が、前夜風呂屋で会うまでは長らく会わなんだというので伊勢屋の番頭に「まあ、それまではごきげんさん」という挨拶をする。これは機嫌という普通名詞に「さん」を付けて挨拶としたものである。形式名詞として他には「ご苦労様、ご馳走様」なども同様に敬称付きが一般的である。「ご苦労、ご馳走」となると形式名詞ではなく、実体を伴う普通名詞であろう。もう一つ「さん」付きの挨拶には、「おはようさん」がある。『不精の代参』で、代参を頼む男が「おはようさん」と入ってきて噺が始まる（『米朝全集』第六巻）。また同全集第八巻の索引では「朝の挨拶。中程度の丁寧語」という註釈が付いている。これらの「さん」は敬称ではなく、接尾辞と分類するのが妥当であろう。

## 第四節 敬称と親族名称の語彙項目

人名など名詞に付ける敬称は、種類と用例が多い。姓名など人名に付けるものと、親族名に付ける場合と、同列に論じることが可能であるように思われる。

人名や親族名に接辞する敬称で、最も丁寧な部類が「様」であろう。噺『風の神送り』は、昨今のように大きな流行病があった折りに、疫病退散を祈願して人形を川に流す、そのために町内で寄進を集めて廻るという筋書きである（『米朝全集』第二巻）。覚え書きという帳面に寄進元と金高を付けていくのであるが、「黒田屋様」などの次に金一分も気前よく出す家があった。「一分やぞ、おい。他の者と違うでえ。もう大きな字で、金一分也、お妾様、様、様と、様の五、六十書いて、町内ざーっと練って歩こ」と若い衆が大騒ぎをする。感謝の気持ちを表すために「様」の字を連ねるといふ発想が面白い。高島氏（2016）に金高の詳細な説明や金銀銭貨幣の換算などがあるが、金一分は高田屋が出した天保銭五枚（天保銭は百文と裏に刻印してあるが、実際は八十文にしか通用しなかったらしい）の五倍である。若い衆が大喜びするのも無理はない。現代の貨幣に換算すると、数万円である。

敬称の「様」について、絶対敬語と相対敬語に関連する会話が『正月丁稚』にある（『米朝全集』第四巻）。往時は、当主が年始の挨拶に回る習慣があった。丁稚を共に連れて行くのも慣行であった。次の会話は、下掲(7)に続く場面である。

(4) 旦「いちいちお目にかかって年始のご挨拶をしてると時間がかかる。(中略)それで門口でお声だけ掛けて名刺を置いていきますのや。さあ、ほんならここのおうちから行きなはれ」  
定「ああ、どない言うて」

旦「渋谷藤兵衛、年頭のお礼を申し上げますとな」

定「ああ、さよか。渋谷藤兵衛様、年頭のお礼を申し上げます。ここへも行きまんのか。渋谷藤兵衛様、年頭のお礼を申し上げます」

旦「これこれ、こっちの名前に様を付けたらいかんがな」

定「けど、自分のご主人の名前、呼び捨てにもでけまへん」

旦「さあ、そう言うてくれるのは嬉しいが、こっちに様を付けたら先さんに失礼にあたるさかい、様は要らんねん」

当主が「渋谷藤兵衛、年頭のお礼を申し上げます」と教えているのにも拘わらず、定吉は「渋谷藤兵衛様」と様を付けて言い直す。「今日は呼び捨てでかまわん」とお許しを得た定吉、図に乗って「藤兵衛が藤兵衛言うてもええ言うさかい、藤兵衛言うてんねん。それをわたいが藤兵衛言うたさかいというて、藤兵衛が怒ったらいかんわなあ、藤兵衛」と切り返して、旦那に「何を言いくさるのじゃ」と窘められる。身内以外に対しては身内に関して敬語を使わないという相対敬語の原則を「こっちに様を付けたら先さんに失礼にあたる」と説明しているのである。丁稚に敬語の指南をしていると言える。

(3)でも採り上げたが、丁稚が朋輩の名前には「どん」を付けて「亀吉とんとん、友吉とんとん」と呼んでいた。この「どん」は「殿」が語源である。二音節目の母音が脱落して「どん」と一音節二拍に変化してものであるが、敬意は極端に小さくなり、親密度が増している。『正月丁稚』

でも、当主が番頭に対して「これは番頭どん、おめでとうさん。本年もよろしゅうに頼みます」と年頭の挨拶を交わしている。『皿屋敷』では、仕えていた青山鉄山に横恋慕の果てに殺されたお菊が夜な夜な井戸から現れ、「恨めしや、鉄山殿」との恨み言で皿の数を読み始める。ここでの「殿」は、語源としての敬意を保っている（『米朝全集』第四巻）。

敬称「はん、さん」を比べると、「さん」が無標で「はん」は有標である。晰『三枚起請』から、「はん」の例を挙げる（『米朝全集』第四巻）。源兵衛が喜六と清八の二人を伴い、キタのお茶屋に乗り込むが、まず源兵衛が「姐貴」と呼んだ女当主と談判している間、二人を外で待たせていた。それを聞いた姐貴が「あのう、お連れはん」と呼びかける。本来は「お連れさん」で、それが船場言葉風に「お連れはん」と変化したものであろう。

米朝師の随筆で、敬称の「さん」と「はん」の区別について書かれた小論がある（『米朝全集』第八巻）。それによると、敬称で「はん」と言えるのは、名前や親族名末尾の母音によって決まるといふ。以下はその要約である。

- (5) 「はん」と言い換えられるのは、名前や親族名末尾がア段、エ段、オ段の母音  
言い換えられないのは、イ段とウ段  
「はん」出現は天保頃、元は女性語であった

この説に従うとイ段で、例えば「佐々木はん、仲居はん」は不可、「さん」と呼ばねばならない。「鴈治郎はん」は「ガンジロはん」としてなら可能、オ段と見做される故、という区別があるというのである。ここでは母音によって「はん」と言い換えられるか否かを論じているので、開音節という前提が付くことになる。定吉など丁稚は普段は「旦那さん」と呼びかけていることから明らかなように、撥音や促音で終わる閉音節では「はん」と言い換えることは不可能である。原則は「さん」付けであって、末尾の母音によって「はん」に言い換えられる場合がある、「はん」の方が上方言葉らしい響きがする、と言える。『大阪ことば事典』583-584頁には、(5)の元になったかと思われる考察がある。(5)との異同点だけを次に挙げる。

- (6) 「ん」で終わる名前には「さん」を付ける。  
「し、す、ち、つ、と」で終わる名前は、促音化する（「住吉さん」が「スミヨッサン」など）  
「竹やん、源やん、おちょやん<sup>\*8</sup>」の「やん」は「ちゃん」に近く、より親しく目下の感じ

例えば「女子衆<sup>おなごし</sup>」は「し」で終わっているので「さん」を加えると「女子衆っさん」となる。「やん」を付ける名前については、規則性は示されていない。「やん」の実例は、『子ほめ』で竹やん宅に新生児の祝いに行き、昼寝している竹やんの父親と取り違える段で「そら、お爺やんが昼寝してんねやがな」と言う（『米朝全集』第三巻）。「竹やん、お爺やん」と二例が纏まっている。

この牧村－米朝説に対して、真っ向から反論を唱えているのが南陸師（2019：133）である。「ごりょんはん、とうはん、仲居はん、中井はん、マツイはん」という実例を挙げて、「はん」を接辞するに際して(5)、(6)のような音韻的制約はない、という説である。イ段、ウ段と撥音で終わる名前には「はん」という敬称接辞は不可能、というのは音韻理論一般として音声・音韻環境の統一性が見られない、という主張には一理ありそうに思われる。音韻環境については、

後ほど検討する。

田辺女史『大阪弁ちゃらんぼらん』に「[サン]と「ハン]という章がある。そこでは上述のような音韻法則による制約ではなく、敬称を奉る対象による語用論的説明がなされている。京阪方言では、神社仏閣に「さん」を付けて呼び習わしている。例えば「天神さん」「生国魂さん」「お西さん（西本願寺）」「お東さん（東本願寺）」という具合である。これらは決して「はん」とはならない。「さん」付けは親しみを込める意味合いもあるが、「はん」では軽すぎて不適切である。また、面と向かって相手に呼びかける際は「さん」であって、「はん」とは言わないという原則で実例を挙げられている。

香村氏（1976）では、「人の名を呼ぶとき」と題した章で、この「さん」と「はん」の区別について論じている。それによると「イ列のイ、キ、シ、チ、ニ、ヒ、ミ、リ。ウ列のウ、ク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユ、ル。ハ行のハ、ヘ、ホ。ア行のオ。それからン」で終わる名は「はん」付けでは呼びづらいし、聴き取りにも支障を来すという。これら音の中では例えば、上で挙げた「ガンジロはん」とは矛盾する。個々の音について「はん」付けで呼べるか呼べないかに関して、どうも個人差があるようである。しかしながら「シ、ス、チ、ツ」の四音で終わる名については、「はん」付けでは発音しにくいことは確かである。「はん」付けは非常に不自然で、「さん」付けの際も音声・音韻変化が生じる。通常の会話では「小林さん、甘粕さん、野口さん、赤松さん」はそれぞれ、「こばやっさん、あまかっさん、のぐつつあん、あかまつあん」となる。後二者における「つつあん」は、音韻変化としては相互同化である。「ん」で終わる名称もまた、「はん」付けは実質的に不可能である。「坊さん」は「ぼんさん」であって、「\*ぼんはん」にはならない。

また同書では、丁稚、手代小番頭、大番頭と分けて名前や敬称について述べてある。丁稚は定吉など「吉」、手代小番頭は「七」、大番頭は「助」各一字が付くという。愛称若しくは敬称は「定吉」なら「定吉っとな」、「徳七」なら「徳七っとな、徳七つつあん」、「庄助」は「庄助はん」と「どん」と「さん、はん」の区別もあった。また女子衆は「お松っとな、お梅どん、お竹どん」で、古株になると「お梅はん」というような呼び方であったという。

## 親族名称

親族名称は別項を立てて見ておこう。これは「さん、はん」と密接に関係しているが、また別の音声的・音韻的側面からも興味深い。

母親を指す「お母はん」の例は少ない。噺『まめだ』で、役者の市川右三郎が芝居の出番を終えて自宅に戻り、「お母はん、ただいま」と挨拶する（『米朝全集』第七巻）。「母者人」という呼び方は、芝居でも呼びかけとして頻用される。サゲは「お母はん、見てみ。……狸の仲間から、ぎょうさん香燐が届いたがな」。噺『肝つぶし』では、吉松が恋煩いで寝付いているのであるが、その原因となった夢の中で呉服屋の娘と店先で喋っている（『米朝全集』第二巻）。粗相のお詫びに反物を一反進呈するという申し出に、吉松は「わて独り者で、こんなもん縫うてくれる奴おりまへんねん」、娘は「お母はんでも」、吉松「さあ、お母<sup>か</sup>んも、ずーっと前に死んでしもて」。娘は丁寧に「お母はん」と称しているが、吉松は「お母ん」と素っ気ない。他の噺でも「お母はん、おかん」共に実例が少ないのは意外である。

それ以上に、ありそうで噺では見られない呼称が「お母ちゃん」である。現代の口語日本語でも幼児語の部類に分類されそうであるが、これが見られるのが噺『立ち切れ線香』である（『米

朝全集』第五卷)。恋煩いで寝付いた芸妓の小糸が、思い人であった若旦那に誂えてもろうた比翼の紋入りの三味線が届いたので、実の母親に「お母ちゃん、この三味線、あて弾きたい」と願う。この直後、小糸は三味線に一撥入れて事切れてしまうのである。花街の仕来りもあるが、ここでは実の母親でもあるので甘えて「お母ちゃん」と呼んでいるように思われる。

「母者人」という呼び方は、古風に響く。噺『軒付け』で、素人浄瑠璃が近所を廻って軒先を借りて義太夫節の稽古をしようと試みるが、どこでも断られる（『米朝全集』第六卷）。ある家では「うち、病人が居てまんねん」という返答であったので、「どなたがお悪うございます」と問うたところ、「母者人がえらい熱でな」と答えが返ってきた。噺『肝つぶし』では、主人公の松が、「年月揃うた女……あっ……うちの妹のお花や。死んだ母者人が、お花の生まれは人に言うことならんで、内緒にしときやちゅうて」と考えている（『米朝全集』第二卷）。「年月が揃う」というのは例えば子の年、子の月、子の日に生まれたというような状況を指す。『不動坊』では、旅先で御難に遭遇して呆気ない最期を遂げた講釈師の不動坊火焰先生、未亡人のお滝さんが再婚したところへ不動坊の幽霊を出そうという計略が持ち上がる（『米朝全集』第七卷）。「幽霊の衣装だすのやが、これ、死んだ母者人の長襦袢がおまんねん」という相談になる。

「母者人」を簡略化したような「母人」形は珍しい。噺『故郷に錦』で、母親に「これ、作次郎せきくぼん、降りとおいなはれ」と呼ばれた息子が二階で「ははっ、母人それへ、参るでござろう」と芝居がかった所作になる（『米朝全集』第三卷）。「中の舞」というお囃子が入って、一層芝居がかかる。サゲでは普通の言葉遣いに戻って「でも、お母はん、故郷へは錦を飾れと言います」。ここでの呼び方が「お母はん」である。噺の中段で、作次郎が伯父おと談判している場面では、「ある晩も、だいぶ遅なって帰って来たら、お母ん、わて待ってる間に先に寝てしまいましたんやろなあ」。「おかん」とは、些か品のない呼び方である。

芝居などでもよく耳にする「母者人」という呼称に比べて、他の親族名称で「者」が付く場合は少ない。噺ではないが、『米朝全集』第八卷に収録された「思い出の人・鶯春亭梅橋」という文章で、「どうか兄者の分まで長生きして、この上ともに幻妙華麗な花々を開かせていただきたいと念願して、この拙文の筆をおく」と結んでいる。「兄者」とは、時代がかって、また芝居がかって荘重な響きがする。

接尾辞として「御」が後続する呼称については別に扱うが、「御妹御前」という特殊な例が一例だけ見られる（『子猫』、米朝全集第三卷）。「御」という接頭辞と「御前」という二重の敬称も異例なら、字面もまた仰々しい。場面としては、番頭が挙動不審な女子衆のおなべに暇を出す談判という切羽詰まった局面であり、番頭は焦って普段の言葉遣いから逸脱しているというようにも思われる。「御寮人さんの御妹御前」として言語的にも丁寧おに扱う意図があったものであろうが、過剰敬語の例となりそうである。

音声・音韻変化によって「さん」が「つあん」となることがある。前項(6)でも「はん」という見出しの下で言及されていたのであるが、「お父つあん、五郎八つあん」などに見られる。「つ、ち」で終わる名前に「さん」を接辞する場合に「つあん」と変化する。「五郎八つあん」の方が分析しやすい。「はち」の「ち」音と「さん」の「さ」音が相互同化を起こし、促音が挿入されたものであろう。他方で「お父つあん」は「おとうさん」から変化する段階を追いくにくい。実例を釈師『おてらくご』に収録されている先代笑福亭松喬師口演の筆記『お文さん』から挙げる。船場のさる御家で、若旦那の作次郎が「お父つあん」と父親に呼びかける。

噺『親子茶屋』は、お互い知らずに遊んでいた親子が対面して、「あんた、お父っつあん」「倅か。ああ、必ず博打はならんぞ」で下げる。また噺『親子酒』でもサゲの前で「うわあー、お父っつあん、また飲んでるなあ」「なにっ、倅か（後略）」（共に『米朝全集』第二巻）。父親から息子への呼びかけが「倅か」という点も共通している。

最後に、「お婆さん」が約まって「おぼん」になる例について見ておく。「お婆さん」は中立から丁寧にかけての度合いと感ぜられるが、「おぼん」となると途端に卑罵語化する。噺『地獄八景亡者戯』で幫間の繁八が三途川で「そのお婆んというのを金でうんといわしたらよろしいのん」と尋ねる場面がある（『米朝全集』第四巻）。また噺『軒付け』では、素人浄瑠璃の太夫連中が語る場所に困って、長屋の奥に一人暮らししている「糊屋のお婆んがいてまっしゃろ」と座敷を借りる相談をする（同第六巻）。お婆さんがべんちゃらで「あんさん方、なかなか浄瑠璃が上手じゃな」と愛想を言うのに、「お婆ん、なぶりなはん」と返す。呼びかけにも「お婆ん」とそのままである。三音節五拍の「お婆さん」から二音節三拍の「おぼん」に変化する中間過程は、全く想定できない。三音節五拍から二音節三拍に変化しているのであるが、段階的变化は想像しにくい。「お爺さん」は「お爺やん」となったが、それほど野卑度は高くない。

## 第五節 接辞の語彙項目

### 接頭辞

ここでは接頭辞について論じる。接頭辞「お、ご」には、直接に話しかけている聞き手に対する敬意表明もあるが、丁寧語あるいは美化語という側面も認められる。「み」は専ら美化語であろう。

### 「お、ご」

噺『正月丁稚』冒頭で、当主と定吉が次のように会話をしている場面がある（『米朝全集』第四巻、振り仮名は省略した）。

- (7) 旦「ものの頭におの字を付けると、丁寧聞こえるな」  
定「ああ、おの字を付けまんのん。はな、正月言わんと、お正月でなもんでんなあ」  
旦「そうそう、そういうふうに言うのじゃ」  
定「ほな、旦那さんなら、御旦那さんと、こない言いまんねやな」  
旦「御旦那さんはおかしいが、まあまあそういうとこやなあ」  
定「ほな、御寮さんやったら、おん御寮さん」  
旦「いや、御寮人には、初めから御の字が付いてるさかい、それは要らんのや」  
定「ほな、番頭はんやったら、御番頭さんてなもんで」  
旦「そうじゃ」

当主が丁稚に躰を施すような態で言葉遣いを教えているが、言語学的にも興味深い。「御旦那さん、おん御寮さん」が過剰敬語になることなど、語源を承知していないと正誤の判断が不可能であろう。この後は、「御定吉」と自分の名前に御の字を付けたり、「木類には御の字は要らん」と言われたので「桶」のことを「け」と呼ぶ、というような言葉遊びが展開される。

往時、船場のお店では名前を呼ぶのにも男女を分けた。(7)では、御寮人さんを除いて男の名前について「お、ご」を付けるか付けないかという話題であった。ここで、女性の名前に付ける「お」について論じておこう。噺『胴乱の幸助』では、人形浄瑠璃『桂川連理柵』で語られる京は柳馬場押小路にある帯屋の一件を主人公の幸助はんが真に受けて京に乗り込むという騒動を噺にしている（『米朝全集』第五巻）。「帯屋の段」で語られるのは、内儀の名を「お絹」としていた。『胴乱の幸助』では、幸助はんが乗り込んだ帯屋で「いいえ、うちの内儀はお花と申します」と言われる。いずれも本名は「絹、花」と、仮名で書けば二文字であろう。噺『持参金』では、女子衆の名を「おなべ」としている（『米朝全集』第四巻）。このように、女性名は本来は仮名二文字であるが、頭に「お」を付けて愛称らしきもので呼びかけるのである。『米朝全集』第八巻に、噺に関わる随筆集がある。その中で女子衆の名前についても触れられている。「おもよどん、おなべ、お竹どん」と挙げられている。「おもよ」は、「もよ」が本名であるとは考えにくい。そういう場合には、愛称としての「お」を接辞するという事はなさそうである。

女子名に付ける接頭辞「お」について、『七度狐』で珍妙な掛け合いがある。喜六と清八が狐の幻術によって、山道に差し掛かって日が暮れてきたという錯覚に陥る。以下は筑摩書房版米朝全集からの引用である（第二集）。

(8) 喜六「こんなさびしいとこ歩いてて何も出てけえへんやろか」  
清八「別に何も出えへんわいな。まあ、出たところで亀ぐらいのもんや」  
六「亀、……こんな山の中に亀が出るか」  
八「出る。頭に尾の付いた亀が出るな」  
六「頭に尾のついた亀……こんなところから、ずっと尾のついた亀」  
八「そやないがな。頭におの字つけて亀言うてみ」  
六「おかめ、おかめはんちゅうのは、やっぱり<sup>おなご</sup>女子か」  
八「違うねん、おを長う引っ張ってかめと言うのや」  
八「お一かめ……、ああ、怖、わいおおかみ嫌いや」

清八は何を考えたか、狼と言うのに亀から始め、頭に「お」を付けろの、「お」を引張れのと回りくどい指示を出す。「お亀」というのは実在するであろう女性名で、喜六は「お亀はんで、別嬪か」と尋ねる場合もある。これを四拍の「狼」という音に近づけるために接頭辞「お」を長音化する必要がある。一種の言葉遊びとして、ここまで珍妙な掛け合いに仕立てたものであろう。

接頭辞「お、ご」は(7)でも丁寧語を形成するという指摘があった。噺『千両蜜柑』では、「船場あたりの御大家」と地語りで触れられている大店が舞台である。噺に入ると番頭が、思っている若旦那に「お塩梅はいかがで」と見舞うている。続く会話でも「お店、ご近所、ご名医、お診立て」と枚挙に遑がないほど出現する。(7)において旦那は丁寧の接頭辞として「おの字」と言及しているが、「お」は「店、診立て」のような和語に接辞するもので、漢語系「近所、名医」などには「ご」となる。このような区別も現代の標準的日本語と共通である。

## 「み」

「お、ご」より少ないが、同じように丁寧さを加える接頭辞に「み」がある。漢字では「御」で当てる。「みあかし」は灯明の意で、『延陽伯』の口演筆記でサゲに「あーら我が君、もはや日も東天に輝きませば、お起きあつて、嗽手水に身を清め、神前仏前に御灯をあげられ、朝餉の膳につき給うべし。恐惶謹言」「ほう、飯を食うことが恐惶謹言なら、酒飲んだら酔って件の如しやな」とある（『枝雀全集』）。『七度狐』でも、尼寺の庵主さんが「阿弥陀さんの前のお燈明のみあかし」という例が見られる（筑摩書房版米朝全集第二集）。「お燈明のみあかし」というと同語反復のようでもあるが、「灯明に灯っている火」と解しておこう。

嘶『軒付け』は素人浄瑠璃を扱うが、その冒頭は義太夫節を習い始めて間もない男が、お温習いの会で『忠臣蔵』五段目、山崎街道を語るという（『米朝全集』第六卷）。このような会では、初心者向けに御簾内で語るようになっている。この「御簾」、「すだれ」の一字に接頭辞「み」が付いて、後半「だれ」が省略されている。御簾内とえば素人浄瑠璃であるが、『寢床』というネタも大店の当主が下手な浄瑠璃を語って周囲が迷惑するという筋書きになっている（飯島氏編、『文楽集』）。義理で集めた聴衆を前に、旦那は機嫌よく御簾内で語る。一頻り語って御簾を上げたところ、皆高軒で寝ている。解説に「御簾の後ろで語るのを御簾内といい、御簾なしで語るのを出語りという」とある。

珍しい嘶で『深山がくれ』では、深い山と書いて「みやま」と読みを当てている。このような「み」は一種の美称である可能性がある。『日本国語大辞典』から引用する。

(9) み【御・美・深】②（「美」「深」とも）名詞、または地名に付けて、美称として用いる。「み空」「み山」「み雪」「み籠」「み吉野」など。語誌 (1)本来は靈威あるものに対する畏敬を表わした。靈物に属するものだけでなく、靈物そのものにも冠する。（以下、略）

『深山がくれ』という嘶、天草が舞台となっている。山賊の首領である老婆が、鳥原の乱で首魁であった「森宗意軒が妻」と名乗っている。この嘶は、鳥原の乱で落城した者の怨霊を絡めようとしたのかも知れない。日本は「八百万の神」と称するほど、何者でも信仰の対象にする例がある。『深山がくれ』という嘶も、その流れを受け継いでいるかの如き奇怪千万の筋立てである（露の五郎兵衛師による口演筆記）。

「お、み」と接頭辞を二つ連ねた形が「おみ足」である。『欠伸の指南』という嘶で、稽古屋のお師匠はんが「おみ足が違てまんがな。おみ足がナンバでんがな」と足使いが間違うことを指摘する（『米朝全集』第一卷）。ナンバとは、例えば右足と右手が同時に出るような動作である。また、旅嘶に付き物の口上で「旅のお話しをうかがいますのはお客さん方のおみ足取りが早い<sup>\*9</sup>ように、ちゃんとここにもげんが祝うてございますな」という一節がある（『伊勢参宮神乃賑』、筑摩書房版米朝全集第二集、傍点は原著）。「おあし（お脚）」となると別語で、金銭の意である。「おみ足」という語は、「おあし」と区別するために造語されたのかもしれない。口上の段では、小拍子と張り扇（「叩き」とも呼ばれる）を見台の上で叩きながら調子よく喋るのが型である。

## 「あい」

言語学的に接頭辞という部類は、名詞に接辞する場合が大半で無標であろう。本章でこま

で見てきた「お、ご、み」などの例もそうであった。しかしながら侍言葉の部類で、形式的な接頭辞「あい」は動詞に接辞するという点で特異である。『日本国語大辞典』では「語調を整えたり、語勢を添えたりする。改まった言い方として、近代では手紙などに用いる」とある。ここで「語調を整える、語勢を添える」という説明があるように、意味的には全く機能していない。それは実例を検証することで確かめられる。噺『皿屋敷』で、姫路の代官青山鉄山が腰元のお菊に横恋慕し、靡かぬことを逆恨みして計略を用いる（『米朝全集』第三卷）。家に伝わる葵の皿十枚一組をお菊に預け、「これは身共が先祖から伝わる將軍家より拝領の家の宝じゃ。もし、これに万一のことがある場合には鉄山、身に替えてでも申しわけをせねば相成らん」と因果を含める。「申し訳をせねばならん」で意味は通ずるが、「相成らん」という言い方によって重々しく聞こえる。

次はお裁きの場面で、噺『次の御用日』からの例である（『米朝全集』第五卷）。場所は西町奉行所であるが、全面が架空の噺であるから、奉行の名は出ていない。「差し出したる願面によれば（中略）娘糸頭うづの上にて『あ』と申したとある。奉行なんのこともやら相わからん」という仰せである。単に「なんのこともやらわからん」でも十分に意味は通じるが、「相わからん」と言うのも語調を整えるためであろう。一通り常吉の申し立てが終わったところでは「委細相わかった」と、また「相」の重用である。

お裁きでも、次の例は町人である帯屋久七が申し立てる（『米朝全集』第二卷）。帯久が和泉屋与兵衛宅から黙って持ち帰った百両の金子、「返し忘れておりました」と申し立てたところを西町奉行、利息の半額五十両を月賦にするか年賦にするかというご下問。帯久は「えー相成るべくは、月賦より年賦の方が結構でございます」と答えた。これも「成るべくは」というのが自然であるが、「相成るべくは」として重みを持たせている。続く場面で奉行は「さて、これにて金の一件は相済んだ」。また、帯久が利息の残り五十両も即金で払うと申し立てた折には「黙れ、そのほう、さいぜん、なんと申した（中略）そのほうの申し出において年賦一両と相定めたのじゃ」。このように動詞に接辞する「あい」は、万能の如くありとあらゆる場合に可能なようである。

以上の例は話し言葉であっても、奉行や侍の使う堅苦しい言い方が多かったが、次は通常の話し言葉に近い。噺『京の茶漬け』で、留守番をしていた内儀が、大坂で当主が歓待を受けたことに対して「そうそう、あの節はまあえらいご馳走になって相済まんこってした」と礼を述べる（『米朝全集』第二卷）。ここはただ「済まんこってした」では落ち着きが悪い。上記説明の「語調を整えたり、語勢を添える」というのがぴったりとくる場合である。「こってした」は「ことでした」が同化作用によって音声・音韻変化した結果である。もう一例の「相済まんこって」は噺『地獄八景亡者戯』からである（『米朝全集』第四卷）。若旦那のお供である世に來た幫間の一八が、在世中の悪事をべらべらと白状してしまう。盜難被害に遭遇した若旦那が「相変わらずお前という男はしょうのない奴やな。ほんまに、ええ」と嘆くと、一八は「まことに、相済まんこって」と素直に謝る。

次は書き言葉で、質札の例である。噺『近江八景』に、易者に見て貰いに來た客が、遊郭の娼妓から來た文を見せるところを誤って質札を出してしまうという場面がある（『米朝全集』第二卷）。また易者がそれを真に受けて、「一つ金一円八十錢也、右、法被腹掛け二品の代金、当月三十日限りをもって相流し申し候」と読み上げる。質札というような文書の性格上、「相流し申し候」という定型句になるのであろう。

## 接尾辞

次に接尾辞について分析する。人名など名詞に付ける敬称も接尾辞の一種と考えられるが、敬称は別に扱うこととする。

親族名称に接辞される、やや特殊な語尾に「御」がある。『日本国語大辞典』では、接尾辞としての語義を「(「御前」の略されたかたち) 人物を表わす名詞に付いて、軽い敬意を添える」と説いている。『米朝全集』で、酔うて帰って来た父親が息子の嫁に対して「親のわしが得心して仲人を入れた迎えた、うちの嫁御じゃ」と言う(『米朝全集』第二卷)。「嫁御」という呼称はこの一例のみである。『鴻池の犬』では、表に捨て子がしてあると丁稚から報告を受けた店の当主が「よくせき困った親御さんじゃなあ」と嘆いている(同第三卷)。また『五光』という小説では、一宿を求めた旅の者が悪僧に取り憑かれたその家の娘を見て「いや、うまいこといくかどうかかわらんが、ひょっとうまいこといったら、お娘御の病気を助けることができるかもわかりまへん」と言っている。「親御さん、お娘御」両例とも敬称を重ねている点でも共通している。「親御さん」は二重の接尾辞、「お娘御」では接頭辞と接尾辞の併用である。「御」だけでは軽い敬意しか添えられないので、更に接頭辞なり接尾辞を重ねる必要があったものであろうか。語用論的意識の分析という側面からは興味深い実例である。

同じように親族名称に接辞する語尾として、「貴」がある。『日本国語大辞典』の語義では「人を表わす語に付いて、敬愛の意を表わす。近世以降からの用法。友人の人名のほか、伯叔父母、兄弟を表わす語に付くことが多い。「兄貴」「伯父貴」など」と説明してある。『米朝全集』で、三人連れのうち源兵衛が「八年ほど前、兵庫の親父しくじって高槻の伯父貴んとこへ行ってたことがあるやろ」と懐旧談を始める(『米朝全集』第七卷)。「らくだ」では、酔いが回るにつれて脳天の熊五郎と、立場が逆転した紙屑屋との対話が次のように展開する(同書)。らくだを湯灌にしようという場面である。熊「手伝うてくれるか」屑「水くさいことを言いないな、お前。兄弟になろうちゅうたんや。……兄貴、頼むとこう言え」。酔いが回るまで、紙屑屋は熊五郎を怖がって「親方」と持ち上げていた。それが、立場が逆転すると自分が兄貴分で、熊五郎をお前呼ばわりしている。「兄弟分になろう」と提案したのも紙屑屋である。『三枚起請』では、小輝と直談判するためにキタのお茶屋に向向いて、源兵衛がその女当主に「姐貴、じゃまするで」と挨拶している(『米朝全集』第四卷)。このように店と客の関係を親族関係に準えるのは花街の風習であろうか。『風の神送り』でも「姐貴」という表記が見える。このように、小説には親族名称に付ける「貴」は多く見いだせるが、「友人名に付ける」という例はただ一つである。『猫の忠信』で、駿河屋の次郎は「次郎貴」と呼ばれている(同第六卷)。また、親族関係でも兄や姉という年長者に付けるが「\*弟貴、妹貴、娘貴」というように年長者に付ける例はなさそうである。

## 第六節 尊敬語名詞類の纏め

最終節として、ここまでの議論について纏めておく。

第二節で挙げた二人称代名詞を卑尊度に沿って並べてみる。これまで検証した尊敬語としての代名詞を並べてみると、次のようになる。上下に揃えてあるのは、卑尊度が同等であることを示す。



ように、同じ場面でも「こなた、こんた、おまはん」と使い分けをしている場合がある。このような多様性は船場の大店を舞台とする古典落語に特有であり、分析の素材に事欠かないと言える。

人称代名詞以外の統語範疇は、次のようになる。

#### (12) 尊敬語語彙の統語範疇別纏め

一般名詞 お家、しらげ、一文字草、ささ、御衣、おまん、お弁、おざぶ、おぶ、ぶぶ、おみや、おいど、御難、(御)仁、御意、ご如才、究竟

接頭辞 お、ご、み

接尾辞・敬称 -御、-貴、様、さん、はん

このように並べてみると、一般名詞の数が多いということを見て取ることが可能である。一般名詞は、具現化する事物が多様であるから必然的に数が増えるのは道理である。接頭辞は美化語(美称語)を形成するために接辞される。「お、ご、み」の付いた語形は継ぎ足し形式によるものであるから、上掲の一般動詞で「しらげ、一文字草、ささ」のような言い換え形式は少数である。接尾辞には固有名に付けられる敬称「様、さん、はん」を含むものと考えが、これら敬称は姓でも名でも固有名詞全般に接辞される。但し「はん」は音声的・音韻的な制約が伴う。接尾辞としての「御」は親族名称に続く場合に限られる。「貴」は主として親族名称に付けられるが、「次郎貴」というように固有名詞にも付くことがある。例は余り多くない。「はん」や「貴」のように、どのような名前にも付けられるとは言えない類は「汎用性に乏しい」と考えることも可能であろう。

最後に、人称代名詞と一般名詞の差について語用論的な観点から比較しておきたい。人称代名詞は、誰が誰に対して話しかけているかという視点において、語用論的な比重が大きい。主語として陳述文に出現するよりも、相手に対する呼びかけという例が多いように思われる。それに対して一般名詞は「しらげ、一文字草、ささ」というような言い換え名詞以外は、「お、ご、み」という接頭辞が付けられる美化語(美称詞)である。また、人称代名詞は意味範疇が限定されているので、本節の図(10)や(11)で示したように、卑尊度に沿って一定の順番に並べることが可能である。発話される状況において話し手と聞き手は相対しているのであるから、話し手による語彙項目選択は語用論的考慮の結果である。しかし一般名詞は語彙項目の意味範疇がばらばらであるから、そのような体系化は不可能である。

#### 参考文献

浅田秀子(2001)『敬語で解く日本の平等・不平等』東京：講談社。

麻生芳伸(編、1999)『落語百選 春』東京：筑摩書房。

飯島友治(編、1989)『古典落語 文楽集』東京：筑摩書房。

井上史雄(編、2017)『敬語は変わる 大規模調査からわかる百年の動き』東京：大修館。

井上史雄・遣水兼貴(2017)『『敬語の指針』に見る現代敬語の性格変化』井上(2017)所収。

桂枝雀(1995、1996)『桂枝雀爆笑コレクション』全五巻、東京：筑摩書房。

桂文我(2002)『続 復活珍品上方落語選集』大阪：燃焼社。

桂文我(2014)『伊勢参宮神賑』東京：青蛙房。

- 桂文我 (2016) 『初代桂文治ばなし』 東京：青蛙房。
- 桂米朝 (2002, 2003) 『上方落語 桂米朝コレクション』 全八集。東京：筑摩書房。
- 桂米朝 (編、2007) 『四世桂米團治寄席隨筆』 東京：岩波書店。
- 桂米朝 (2013, 2014) 『米朝落語全集』 全八巻、増補改訂版。大阪：創元社。
- 角岡賢一 (2017a) 「上方落語に見られる軽蔑語の実例」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』 第 26 巻。pp. 95-114。
- 角岡賢一 (2017b) 「上方落語に残るお茶屋文化」『京都産業学研究』 第十五号。pp. 125-142。
- 角岡賢一 (2019) 「日本語尊大表現の語用論的分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』 第 28 巻。pp.3-22。
- 角岡賢一 (2020) 「待遇表現としての尊大語と卑罵語」米倉、他 (編) 所収。
- 香村菊雄 (1976) 『大阪慕情 船場ものがたり』 神戸：神戸新聞出版センター。
- 金水敏 (2014) 『コレモ日本語アルカ』 東京：岩波書店。
- 金沢裕之 (2000) 『近代大阪語変遷の研究』 大阪：和泉書院。
- 菊地康人 (1997) 『敬語』 東京：講談社。
- 旭堂南陵 (2019) 『事典にない大阪弁』 増補改訂版。大阪：浪速社。
- 真田信治 (監修、2018) 『関西弁事典』 東京：ひつじ書房。
- 釈徹宗 (2010) 『おてらくご 落語の中の浄土真宗』 京都：本願寺出版社。
- 釈徹宗 (2017) 『落語に花咲く仏教』 東京：朝日新聞出版。
- 関山和夫 (1990) 『安楽庵策伝和尚の生涯』 京都：法蔵館。
- 関山和夫 (2001) 『庶民芸能と仏教』 東京：大蔵出版。
- 高島幸次 (2018) 『上方落語史観』 大阪：一四〇 B。
- 東大落語会 (編、1994) 『増補 落語事典』 改訂版。東京：青蛙房。
- 田辺聖子 (1985) 『大阪弁おもしろ草子』 東京：講談社。
- 竹田晃子 (2017) 「卑罵語と敬語の発達」井上 (2017) 所収。
- 前川佳子 (2016) 『船場大阪を語りつぐ』 大阪：和泉書院。
- 前田勇 (1966) 『上方落語の歴史』 改訂増補版。大阪：杉本稿店。
- 牧村史陽 (1984) 『大阪ことば事典』 東京：講談社。
- 米倉よう子、山本修、浅井良策 (編、2020) 『ことばから心へ 認知の深淵』 東京：開拓社。

\* 1 以下、創元社版の『米朝落語全集』をこのように表記する。筑摩文庫版の全集から引用する折は、その都度註記する。

\* 2 単に「旦那さん」ではなく、「村上の」と実名を出しているのは珍しい。これは後にミナミの幫間繁八が座敷に勝手に上がり込む場面で、人物の特定が必要になるからという伏線を張っているのである。

\* 3 これも一種の役割語と言えるであろう。例に採った言い方は、「あなたの言葉は私にとって難しくて分かりにくい」というように補うことが出来る。金水氏 (2014: 23) で指摘されているように、格助詞が脱落しているのである。加えて、音調を辿々しくすれば外国人が話す、あるいは外国人に向かって話すような調子になる。

\* 4 本文中で「口演筆記」としたものは、次のホームページを参照している。

上方落語メモ <http://kamigata.fan.coocan.jp/kamigata/index1.htm>

- \* 5 本文で指摘したように、「白根草」は葱とは別物である。
- \* 6 同書では、新妻が初めて長屋を訪れた挨拶として「せんにくせんだんにあってこれを学ばざれば金たらんと欲す」と文字化している。「せんにく、せんだん」が意味不明である。この挨拶は、参照すべき文献が少ないことも難点である。
- \* 7 人道的見地からは、自分が試し斬りにするのに無辜の人を切り捨てるというような行為は許されるものではない。小咄のサゲは、刀の切れ味が鈍いので斬り付けられた方は「どいつやい、毎晩毎晩どつきに来るのは」と命に別状がないことになっている。しかしながら、この人命軽視という心根は説明が付かないであろう。
- \* 8 「おちょやん」の語源は「ちょぼ」で、噺『三枚起請』ではお茶屋で使い走りをする幼い女の子である。
- \* 9 本来的な漢字の書き分けからは「おみ足取りが速い」とするのが正しいであろう。ここでは原典に従う。